

聖書：マタイ 21：33～46

説教題：捨てた石、要の石

日時：2020年3月15日（朝拝）

イエス様は神から遣わされたまことの王として神の都エルサレムへ入って来ましたが、民のリーダーである祭司長や長老たちはイエス様を受け入れず、むしろ挑戦して来ました。その彼らにイエス様は3つのたとえを語っています。一つは前回見た「二人の兄弟のたとえ」。二つ目は今日見る「悪い農夫たちのたとえ」。三つ目は来週見る「結婚披露宴のたとえ」です。いずれも基本メッセージは同じです。簡単に前回の「二人の兄弟のたとえ」をおさらいしたいと思います。まず兄は父の求めに対して「行きたくありません」と最初は答えましたが、後で思い直して出かけて行きました。一方、弟は「行きます。お父さん」と言いながら、後で行きませんでした。どっちが父の願った通りにしたかと言えば、もちろん兄です。このたとえで祭司長や民の長老たちは弟の側に当たります。初めは「行きます」といかにも従順な者である振りをしながら、結局は神の御心に従わない。神が遣わしたイエス様を受け入れない。一方、取税人や遊女たちは最初は神の御心に沿わない生活をして来たけれども、今や思い直して、神が遣わしたイエス様を受け入れ、神の御心に従っています。その彼らの方が先に神の国に入っている！とイエス様は言われました。

これに続いて語られたのは「悪い農夫たちのたとえ」です。ここに舞台としてぶどう園が出て来ます。ぶどう園は旧約聖書でイスラエルの象徴として使われて来ました。そのぶどう園を所有する主人は神様。主人はぶどう園のことを心にかけています。垣根を巡らし、その中に踏み場を掘り、見張りやぐらを建てます。垣根は動物たちにぶどう園が荒らされないように、見張りやぐらは泥棒が来ないように、あるいは火事が周りで起こっていないか見張るために、踏み場はぶどうジュースを絞るための場所です。主人はこうして、ぶどう園から豊かな収穫が得られることを願っています。そして農夫たちにこの管理を委ねます。この農夫たちは、ここではイスラエルの民のリーダーたちを指します。その彼らに主人は収穫の時にしもべを遣わした。そういうたとえです。

まずこのたとえが教えていることは何でしょうか。それは神は繰り返ししもべを遣わしたということです。このしもべは預言者たちのことを指しています。神はイスラエルを心にかけて多くの預言者を遣わしました。35節に、一人を云々、一人を云々、一人を

云々と記されていますが、神は願った通りにならなかったと言ってすぐ立腹して、農夫たちを滅ぼすことをしませんでした。さらに前より多くのしもべたちを遣わしました(36節)。ここにイスラエルに対する神の特別の愛、慈しみ深い働きかけを私たちは見ます。そしてついに主人は自分の息子を遣わします。これは神の御子なるイエス様を指します。多くの預言者を遣わした神の働きの頂点として、神はついにご自分の一人子さえも遣わされたのです。

しかしこのことが強調されれば強調されるほど浮き彫りになって来るのはイスラエル、特にそのリーダーたちによる拒絶です。ぶどう園を管理していた彼らは、主人が遣わすしもべたちをひどく扱いました。ある者を打ちたたき、ある者を殺し、ある者を石打ちにしました。さらに神が遣わし続けた預言者たちに対しても農夫たちは同じことを繰り返しました。そしてついに主人が息子を送って来た時、どうしたでしょう。さすがに主人の息子なら敬ったのでしょうか。38節で彼らはこう言います。「あれは跡取りだ。さあ、あれを殺して、あれの相続財産を手に入れよう。」　そう言って一層鼻息を荒くして飛び掛かります。そしてついにその息子さえもぶどう園の外に放り出して、殺してしまうという話をイエス様はされたのです。

これは農夫たちの方が好き勝手に振る舞っている話のように見えます。人間たちの方がより力があって、主人(すなわち神)の方が弱々しく見えます。しかしそれは大きな勘違いであることが、この後に示されて行きます。このたとえの大事なポイントはぶどう園の主人はこのままでは終わりにしないということです。イエス様は40節でこう問います。「ぶどう園の主人が帰って来たら、その農夫たちをどうするのでしょうか。」　彼らは次の節でこう答えます。「その悪者どもを情け容赦なく滅ぼして、そのぶどう園を、収穫の時が来れば収穫を納める別の農夫たちに貸すでしょう。」　農夫たちは繰り返し遣わされたしもべたちばかりか、主人の大切な息子さえも殺しました。彼らは、息子が来たということは、もうその父親は死んだと思ったのかもしれませんが。だから彼を殺せば、このぶどう園は我々のものだ。あるいは主人が生きていても、もう高齢で何もアクションは起こせない。これまでのしもべたちに色々なことをしても主人は我々に何もして来なかった。もうその力がないのだ。だからこの息子に何かをしたところで大丈夫だ。今や我々の方が力がある。そう考えたのかもしれませんが。しかしそれは大きな勘違いでした。主人は力がないから反抗する農夫たちに何もしなかったのではなく、ただ彼らに「忍耐」していただけたのです。自分が遣わすしもべたちが辱められても、

すぐにふさわしいさばきを与えず、むしろ次のしもべたちを送り続けたのは、神の恐るべき「忍耐」と「寛容」の現れなのです。しかし愛する息子は神が送ることのできる最終カード。この方を退けるなら、もう神は他に送る人を持っていません。これ以上はあわれみの余地はないのです。神は必ずやって来て、その農夫たちを滅ぼし、ふさわしいさばきを彼らの上に下す。そのことがこのたとえで語られているのです。

このポイントは私たちにも当てはまることではないでしょうか。私たちにも神の忍耐に基づいた働きかけがあります。それを無視して、少々神の御心に反する生活をしても案外うまく行きます。その内、私たちもこう思うかもしれません。神は私を戒める力など持っていないのではないか。私はもっと私の好きなように生活しても問題ないのではないか。誰も私を咎めないのではないか。しかし神は侮られるお方ではありません。その歩みを続けるなら、どこにもないと思われた神の御手が突然自分の生活に力をもって介入し、大変なショックを受けることになります。そして後悔しても後悔し切れない神の怒りとさばきを身に招くことに至るのです。

イエス様は 42 節で「あなたがたは、聖書に次のようにあるのを読んだことがないのですか」と問うて、詩篇 118 篇 22～23 節の御言葉を引用します。「家を建てる者たちが捨てた石、それが要の石となった。これは主がなさったこと。私たちの目には不思議なことだ。」ここに彼らの勘違いの二つ目のことが言われています。それは彼らの捨てた石が要の石になるということです。この詩篇の言葉は、もともとはイスラエルを指す言葉だったと思われます。周辺の国々から見下され、その存在を脅され、捨てられるような者たち。しかし神はその捨てられた石、イスラエルを、ご自身の家の要の石とされる。この言葉が、イスラエルの代表あるいはそのエッセンスとも言うべきメシヤなるイエス様に当てはめられることはふさわしいことと言えます。

先のたとえで主人の息子が捨てられ、殺されたように、神の御子イエス様も人々から捨てられ、殺されます。しかし話はそれで終わりではないということです。その人々が捨てた石が「要の石」となると言われています。この「要の石」という言葉は、新改訳第 3 版までは「礎の石」と訳されていました。この石の理解については二つの可能性があるようです。一つは建物の土台部分に据えられる「礎石」のこと。もう一つは建物の上部にあって壁と壁とをつなぎとめ、建物を完成させる「かしら石」のこと。人々はイエス様を捨て、十字架の死へと追いやるかもしれません。しかしイエス様は、まさにそ

のを通して神の家の要の石とされるのです。神はこのイエス様を復活させ、まことの神の民がより頼む救いの岩とするのです。ここにイエス様を捨てた者たちの大いなる勘違い、見当違いが明らかにされるのです。

私たちはここで、イエス様がどんな気持ちでこの言葉を語っておられたかを考えてみることは意味のあることだと思います。イエス様はご自身に反対する者は最後にどんなどんでん返しを受けるのか、面白おかしく語っていたわけではありません。イエス様がここで語っているのは父なる神の愛がずっと拒否されて来た話です。何度もしもべたちを遣わしたのに、それに反抗し続けたイスラエルの歴史、神の忍耐の歴史です。そしてイエス様はその頂点として、ご自身が殺される話をしました。それはもう数日後のことです。イエス様はそんなこの時、旧約聖書を引用しながら、ご自身がこれからいよいよ見捨てられた石とならなければならないこと、しかしそのことを経て要の石となることをもう一度確認しておられたのです。そのゴールを見据えて、十字架への道から逃げずに、最後の受難へ深い思いをもって進もうとしておられるイエス様のお姿がここにあるのではないのでしょうか。

イエス様はこのように要の石なるお方ですから、この方により頼まない者は神の国から追い出されることとなります。そのことが 43 節で述べられています。神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実を結ぶ民に与えられると。そしてイエス様に信頼しない人は神の国が取り去られるだけでなく、イエス様ご自身がその人にさばきをもたらす岩となることが 44 節に述べられます。「この石の上に落ちる人」とは、自分からイエス様にぶつかって行く人のことでしょう。その人はイエス様を打ち壊すことができるどころか、自分自身が粉々に砕かれ、滅びることとなります。また後半の「この石が人の上に落ちれば」というのは逆にイエス様の方からその人にぶつかって行く場合です。私たちの方からイエス様に向かわなくてもイエス様の方から私たちに迫って来られる。そしてその人も押しつぶされ、滅びに至る。イエス様を受け入れない人には、このような結果が臨むのです。それは私たちがこの世にある時から始まるかもしれません。色々な点で私たちの生活が壊され、私たち自身が壊れて行くということが起こる。そして究極的にこれは最後のさばきの日に成就します。神が立てた唯一の岩を退け、これに信頼しなかった者は、それにふさわしいさばきと報いを自らの上に刈り取ることに至るのです。

最後 45～46 節には祭司長やパリサイ人たちの反応が記されています。彼らはこの話

が自分たちを指して語られているものであることに気づきました。そこでイエス様を捕らえようとし、この時は群衆を恐れ、そのことが実行できませんでしたが、こうしてまさにたとえ語られた通りのことへと彼らは進んで行くのです。このたとえで警告されたにもかかわらず、益々そのことへと突っ込んで行くというアイロニーがここにあるのです。

私たちはこの箇所からどのように自分へのメッセージを受け取るべきでしょうか。神がイスラエルに繰り返し預言者を遣わされたというたとえは直接的には私たちには当てはまらないかもしれませんが、しかしここに示されているような忍耐をもって、愛の働きかけをしてくださっている神という真理は私たちそれぞれにも当てはまるのではないのでしょうか。そしてついに神は最後の使者として御子を送ってくださいました。この方に私たちがどう応答するかは私たちの永遠の運命にとっても決定的なことであるという真理は、私たちにもそのまま当てはまるものです。驚くべきことは、神は一見弱々しく思われる方法で私たちの救いを備えてくださったということです。神の御子なる方が人々から捨てられ、苦しめられ、ついに殺される。しかしそのことを通して神は私たちを罪から救い出すためのみわざをなしてくださいました。20章28節で言われたように、私たちを罪から救い出すための贖いの代価を払ってくださいました。そうしてイエス様は神の家になくてはならない決定的に重要な石、要の石、救いの岩になってくださった。ですからこの方から離れては救いはありません。使徒の働き4章10～11節でペテロは今日の箇所で引用された詩篇18篇を引用してこう述べています。『あなたがた家を建てる者たちに捨てられた石、それが要の石となった』というのは、この方のことです。この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。」 私たちは同じペテロが彼の第一の手紙2章4～5節で述べた次のことばに従って歩みたいと思います。「主のもとに来なさい。主は、人には捨てられたが神には選ばれた、尊い生ける石です。あなたがた自身も生ける石として霊の家に築き上げられ、神に喜ばれる霊のいけにえをイエス・キリストを通して献げる、聖なる祭司となります。」 この方に連なるところに、神の家の一部として新しく築き上げられる生活があります。そしてこの方と結ばれるところに、この方によって実を結ぶ生活、そして私たちの目には不思議なことだ！と驚嘆せずにはいられない神がキリストにあつて用意くださった素晴らしい救いの歩み、私たちの思いをはるかに超える祝福の生活が導かれて行くのです。